

独立行政法人国立病院機構

横浜医療センター

〒245-8575 横浜市戸塚区原宿 3-60-2

TEL 045-851-2621 FAX 045-853-8359



関戸先生
還暦お祝いの会

国立病院機構横浜医療センターは、横浜市南西部地域中核病院、地域医療支援病院、神奈川県がん診療連携指定病院に指定されています。救命救急センター、ICU、CCU、SCU、小児救急、周産期センター、NICUを備えた地域の急性期型高度総合病院です。

外科は、関戸統括診療部長の御指導の下、9名のスタッフが2チームに分かれて診療を行っています。2019年の主な手術件数は、腹臥位胸腔鏡下食道切除再建3例、乳癌切除20例、胃癌切除60例（うち腹腔鏡下手術20例）、大腸癌切除102例（うち腹腔鏡下手術93例）、肝切除32例、脾頭十二指腸切除18例、腹腔鏡下胆嚢摘出96例、開腹胆嚢摘出35例、虫垂切除71例、単径ヘルニア根治術117例でした。特に大腸癌手術数、腹腔鏡下手術数の増加が目立ちます。手術総数は730件で、2018年とほぼ同じ件数でした。

若手外科医にとっては、大小の消化器手術から外傷系の緊急手術まで幅広く執刀経験ができ、心臓血管外科（女子医系）や呼吸器外科（1外）の手術にも入りやすいことから、外科専門医修得にとっても有利な病院です。内視鏡外科トレーニングは、国立病院機構の全国規模の研修会があり、チームで毎年参加し、非常に成果が上がっています。

研修医の先生たちにも外科手術の楽しさを伝えるべく、開腹操作やラパコレで胆嚢漿膜切開、CUSAで肝切離等の手術手技、学会発表を経験してもらっています。今年は11人の初期研修医が外科を研修しました。今後も外科医になる若手を増やせるように尽力していきたいと思っています。

話題として（昨年の年報に載せたかったのですが）は、関戸先生が還暦を迎えられ、今まで当院をローテートされた先生方や現在のスタッフに声をかけ、還暦お祝いの会を開きました。手術中は時として厳しく指導して頂くこともあります（19度急風!!）、皆から愛される関戸先生のお人柄に惹かれて、遠くは大分から、多数の出席者があり、一同感謝の気持ちをこめて盛大にお祝いすることが出来ました（写真）。

当院の珍百景（写真）、冬になると謎にライトアップされますが、いつも誰もいません（笑）。

今後とも地域で選ばれる病院になるべく、スタッフ一同協力しあって日々診療を頑張っていきたいと思います。同門会の先生方には今後とも御指導、御協力の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

（文責：松田悟郎）





平成31年の横浜市民病院は、新病院の建設が順調に進み、現在本体工事はほぼ終わり内装工事を急ピッチで行なっているところです。2020年5月の新病院開院まで、残すところあと2ヶ月余りとなり、現在病院全体が移転に向けて一丸となって取り組んでいるところです。

さて平成31年の外科は、消化器外科6人（うち大学ローテート2人）、炎症性腸疾患外科5人（うち大学ローテート1人）、乳腺外科2人（うち大学ローテート1人）のスタッフと4人の後期研修医、2ヶ月毎にローテートする3人の初期研修医で診療を行いました。外科一同、外来、病棟、手術、救急診療と日夜仕事に励んでいます。

さて、外科が消化器外科、乳腺外科、炎症性腸疾患外科の3つに別れてから11年経過しました。2019年の総手

術件数は、外科全体で前年とほぼ変わらず1320例でした。内訳は消化器外科約873例、炎症性腸疾患外科約299例、乳腺外科約148例でした。

消化器外科では、大腸癌手術症例数は前年より増加し、腹腔鏡下の手術の割合も75%と増加しました。一方で、平成29年から導入した腹腔鏡補助下直腸固定術（直腸脱の根治術）は71例行いました。

胃癌手術症例数は減少しましたが鏡視下手術は増加し、肝胆膵領域では膵頭十二指腸切除術を10例、腹腔鏡下肝切除術を5例行いました。

乳腺外科は、前年とほぼ同数で、ほぼ全例でセンチネルリンパ節生検手術を導入し、地域連携パスの運用も増加させました。



炎症性腸疾患外科は、紹介患者数の減少からやや手術件数は減りましたが、従来通り関東圏はもとより全国から患者を受け入れています。

緊急手術は180例で前年とほぼ同数でした。急性虫垂炎は昨年の67例から83例とやや増加しました。市民病院全体として予定手術が多く手術室も9室と限られているため、現在のスタッフの人数から考えると現在の手術件数が限界と思われます。

2020年度から始まる当院での初期研修医のプログラム

(外科コース)には、多数の応募の中から2名がマッチングしました。これにより、研修医3年目以降に外科専門医プログラムを選択する研修医が、一人でも多くなることを期待しています。

今後も地域中核病院として周辺の医療機関と連携を密にし、より一層地域医療に貢献していきたいと思います。これからも、ご指導ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

(文責：望月康久)

藤沢市民病院

〒251-8550 藤沢市藤沢 2-6-1

TEL 0466-25-3111 FAX 0466-25-3545



2019年度の人事異動では、山本、矢後、小笠原、豊田が退任しました。この4名に代わり、菅江、浅野、井上、池田が着任し、山岸、牧野、南、田と外科専攻医の川島を加えた9名で診療しました。例年と同様に、浅野、井上、池田、川島が呼吸器外科をローテートしました。また、救急外科には、井上、池田、川島がチームの一員としてローテートに加わり、緊急手術、外傷治療に携わりました。さらに例年同様、2か月毎に卒後1年目、2年目の初期研修医がローテートし、手術・病棟管理を担当しました。

今年度の話題は、9月より運用を開始した直腸癌に対するロボット支援手術です。藤沢市内だけで3台のda Vinciが導入されている激戦区であり、地域の患者さんにとっては選択肢が多く困ることはないと思いますが、病院としては高価な医療機器ですので、いかに利益を上げ

られるか試行錯誤しています。また、本年度も恒例となった地域の小学生と保護者を対象とした「病院お仕事体験ツアー」を夏休み期間中の8月に実行しました。外科は、腹腔鏡トレーニングキットと超音波凝固装置を用いての模擬手術を担当し、大好評でした。未来の医師、できれば外科医を目指してほしいものです。

2019年1月～12月の主な手術件数は、乳癌127例、肺癌61例、食道癌3例、胃癌67例、結腸癌92例、直腸癌62例、原発性肝癌4例、転移性肝癌7例、胆道癌4例、膵癌12例、胆石症90例、虫垂炎80例、ヘルニア105例でした。全体手術症例数は912例で、前年より21例増加し初めて年間900例を超え過去最高を更新しました。定時手術695例、緊急・臨時手術217例で、緊急・臨時手術が多い状況が続いていますが、これらは救急外科が主に担当しているため、以前と比較すると外科医のQOLは改善してい

ます。しかし、救急外科だけで全ての急患を担当するのは人員的に不可能なので、外科も連携を密にとりお互い助け合って診療しています。院内での外科の特徴としては、手術件数もさることながら、扱う癌症例の増加に伴い外来化学療法も激増し、乳腺を含む外科は外来化学療法室の利用が年間2,000件を超え、最も多い診療科となっていることです。

診療体制は、例年通り上部消化管担当の牧野がガイドラインに則り腹腔鏡下胃切除術を指導しており、今年は年間14例に施行しました。大腸癌に対する腹腔鏡下手術は152件（98.7%）となり、ほぼ全例腹腔鏡手術となっています。肝・胆・膵は南を中心に例年と同様の手術件数を行い、多発肝転移症例も術前化学療法後に積極的に切除し、適応を厳格にして腹腔鏡下肝切除術も施行しています。大腸癌と転移性肝癌ではICGを用いたナビゲーション手術を施行しており、より低侵襲で根治性の高い手術を行っています。例年同様、緊急の腹腔鏡下胆嚢摘出術や虫垂切除術は若手の腹腔鏡技術向上に有用で、積極的に施行しています。鼠経ヘルニアに対するTAPPも主に右側、両側症例に適応を絞り、若手の腹腔鏡手術の修練の場となっております。

学術関連は、学会発表が54演題（シンポジウム2演題、ワークショップ3演題、要望演題3演題）で、外科学会、消化器外科学会、臨床外科学会、内視鏡外科学会は必ず演題登録しています。また、論文発表6題と診療だけでなく学術面でも意欲的に取り組んでいます。例年通り消化器内科、外科合同カンファレンスを地域の開業医の先生方と2か月に一度院内で開催し、紹介患者さんの情報交換と症例検討会を行っています。一方、毎年開催している近隣病院との連携、親睦を目的とした「湘南colon cancer conference」「湘南大腸癌セミナー」は、コロナ感染拡大の影響もあり次年度へ延期となりました。当院は第二種感染症指定医療機関なので、このような事態になると重症例や湘南東部2次医療圏の患者さんを受け入れる体制が優先となります。早期に収束し通常診療体制に戻ることを願っています。

これからも、地域医療に貢献し、高水準の医療を提供できるよう努力してまいりますので、支えていただいた多くの方々におかれましては、ご指導、ご鞭撻のほどを何卒よろしくお願いいたします。

（文責：山岸 茂）

伊東市民病院

〒414-0055 伊東市岡 196-1

TEL 0557-37-2626 FAX 0557-35-0631

◆ 関連施設勤務者

副病院長・診療部長・外科部長 神谷 紀之（平.4）

2019年の当院外科は、消化器・腫瘍外科からは私1人と京都府立医大出身の城野医師（S59卒）に、4月から小倉玲那医師（H22卒）が加わり常勤3名体制でした。地域医療振興協会からは、2020年1～3月に、東京ベイ・浦安市川医療センターから若手外科医が3ヶ月間支援に来てくれています。NCD登録数は282件で、微増でした。

大腸癌根治術における鏡視下手術の割合は28/40例、70.0%でした。こちらも年々増加傾向です。次年度は手術室使用枠の見直しが計画されており外科で使用できる時間が増えそうなので、さらに鏡視下手術を増やしてゆきたいと思います。その他手術の変化ですが、2018年の急性胆道感染症に対するガイドライン改定に伴い、当院でも緊急のラパコレが増えてまいりました。ただし働き働き方改革との兼ね合いもあり、闇雲に緊急でおこなう訳にはいかないので麻酔科手術室と相談し一定の基準を



設けて出来るだけGradeI、IIは早期LCをおこなうようにしています。

以前この欄でNP（Nurse Practitioner）について書かせていただきました。現在当院ではNPではなく特定行為看護師が3名活躍しており、外科にも1名が配属されています。2015年に制定された「特定行為に係る看護師の

研修制度」に基づいた研修を受けた看護師で、当院では【特定ケア看護師】または【NDC（Nursing Designated Care）看護師】と呼んでいます。通常は外科チームとともに行動し、病棟番や手術助手、手術中の急変・急患対応をおこなっています。当院が参加しているNDC研修プログラムでは、国が指定した38行為すべての修練を積んでおり、外科処置だけではなく内科的管理も任せる事が出来ます。外科領域では補液・電解質・血糖・抗菌薬の管理、ドレーン抜去、硬膜外の投与調整、PICCの挿入等を医師の【包括的指示】のもと、実施する事ができます。例えば、通常は抗菌薬や補液剤を医師が決めますが【包括的指示】だと特定看護師が培養結果等をもとに選択し代行オーダーで投与します。当然書類作成や退院調整等（私たちの苦手分野（？））でも力を発揮するため医師不足に悩む当院では大変大きな戦力になっています。

最近読んだ報道では、厚労省は2025年までに10万人以上を養成したいそうですが、今年3月末で目標の約2%、

2,400人程度ということでした。広まらない大きな原因の一つに医師会と関係職種の反対があるようです。当院でも導入の際、医療技術部からは消極的な意見が多くみられました。しかし特定看護師さんたちの努力で信頼を得たため（むしろ医師よりオーダーが早くて正確）、今では病院中で頼りにされています。もう一つは研修費用や研修のための休暇取得、認定後の診療報酬、給料がほとんど増えない（夜勤がないためむしろ減ることも）など待遇の問題です。2020年度の診療報酬改定で、在宅での特定行為には点数がつくようですが、院内での活動に報酬を認められ特定看護師が増えれば、地方の病院は救われるのではないのでしょうか。

特定看護師を養成中や養成予定の病院の方には、良い事あるよ、お伝えしたく紹介させていただきました。本年度もよろしくお願いいたします。

（文責：神谷紀之）

横須賀市立市民病院

〒240-0195 横須賀市長坂 1-3-2

TEL 046-856-3136 FAX 046-858-1776

横須賀市立市民病院は前回の東京オリンピックの前年、昭和38年12月横須賀市立武山病院として開院しました。以来50余年になる、横須賀市・三浦半島西部地区の中核的病院です。

三浦半島の西海岸に位置し、西には豊饒の海相模湾、東には半島随一の頂、大楠山を望む風光明媚な場所に位置しています。病棟から仰ぎ見る三浦半島の山並みはなかなかのもので、最上階の和食レストランから望む相模湾越しの富士山も絶景です。首都圏のリゾート地、逗子、葉山は目と鼻の先で、美味しいもの好き、新し物好きにはたまらない場所も数知れずあります。

横浜横須賀道路の料金改定や平成29年に開通した都市計画道路久里浜田浦線約1.2kmの区間（三浦縦貫道衣笠入口交差点から万葉公園東側交差点まで）使用で、横浜周辺からもぐっと近く、より経済的に通勤可能になりました。

令和元年度（2019年度）の外科は病院管理者久保章（昭50）以下、副院長・診療部長の亀田久仁郎（昭63）、長嶺弘太郎（平6）の他、個性溢れるメンバーで日夜診療に励んでいます。三宅益代（平21）は平成31年1月帰国来、子供3人を抱えながらも若手リーダーとして活躍し



令和元年度メンバー（朝カンファランス終了時）

ています。小暮悠（平21）は手堅く仕事をこなし、藤原淑恵（平24）は噂に違わぬ「救急の女王」としての存在を示しています。さらに日大出身の「理論派」杉浦（平6）を加えた計7名で診療にあたっています。

高齢化社会の波を受け、複数の併存疾患を有する超高齢者の重篤な症例も本当に多くなってきました。患者さん、そしてそのご家族の期待に応える困難さを痛感していますが、これら困難な症例にも外科チーム一丸となって対応しています。

年間の手術症例は350例ほどですが、ほとんどの術者

は若手ローテーターですので、十分な手術経験、修練が積めます。

医局員の皆さん！是非我々と一緒にここで働いてみませんか。

開院以来周辺住民の皆さんからの信頼の厚い地域密着型の病院です（来れば本当に実感します）。必ず皆さんのやる気をおこさせてくれる病院です。

そして厳しく、激しい仕事の後にはグルメを堪能してください。もちろんデートスポットも海沿いを中心としてたくさんあります。

最後に令和元年（2019年）9月26日に厚生労働省が公表した、再編・統合が必要な公立・公的医療機関（再検証要請医療機関）リスト424病院に、当院が掲載された件についてです。横須賀市が同年3月に策定した「横須賀市立病院将来構想」では、市立2病院体制（市民病院・うわまち病院）を維持すること等が示され、すでに地域医療構想調整会議への報告が済んでいます。再検証要請医療機関リストに掲載されたことが、ただちに当院の医療機能に大きな影響を及ぼすことはない、と考えています。

当院は平成22年（2010年）4月以降公益社

団法人地域医療振興協会が指定管理する、所謂「公設民営化」病院へ移行しました。民営化後10年近く経過し、久保管理者の強力なリーダーシップのもと着実な経営改善、健全化を達成してきています。

これもひとえに、同門の先生方のご支援の賜物だと同大感謝しております。

同門の先生方におかれましては新年度も引き続き、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（文責：長嶺弘太郎）

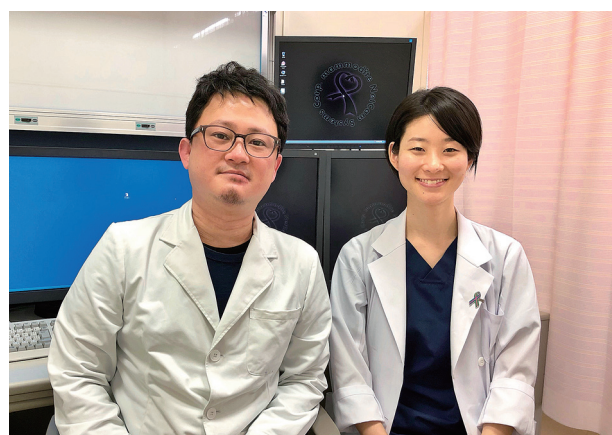


茅ヶ崎市立病院

〒253-0042 神奈川県茅ヶ崎市本村 5-15-1

TEL 0467-52-1111 FAX 0467-54-0770

昭和18年12月、太平洋マーシャル諸島沖での激戦が開始されていた頃、茅ヶ崎市立病院の前身である「町立茅ヶ崎病院」は発足しました。江戸日本橋より十四里目、松並木生い茂る旧東海道、一里塚に程近い国道沿いにあった病院は当時、内科、外科、耳鼻科、産婦人科の4科30床、素朴なぬくもりを感じる二階建ての古い木造建築であったと聞いています。終戦の混乱や、その後の大きな社会変化の中で病院は大きな変遷を経て、昭和47年に14科311床の総合病院として現在の茅ヶ崎市本村へ移転しました。それからさらに44年の時を経た平成28年、当科乳腺外科が開設。さらに令和2年4月には歯科口腔外科が新設され全27科401床となり、現在では外来年間延べ約21万4千人、入院年間延べ約11万人以上の患者が利用する病院となりました。充実した医療体制・設備を整える茅ヶ崎市内唯一の400床以上の病院であり、地域医療支援病院、災害拠点病院、DMAT指定病院、地域がん連携指定病院



等々、湘南東部医療圏の基幹病院として機能しています。

平成28年4月の乳腺外科新設時、初代科部長として山田顕光先生が赴任され、医員の高畑大輔先生、南澤恵佑先生、小林侑華子先生と共に当科の基礎を構築されました。そして平成31年度からは私、嶋田和博が科部長を引

き継がせていただいております。当院では他科手術増加に伴う乳腺手術枠の減少等ありましたが、それでも小林侑華子先生との2人体制で年間100件の乳癌手術を達成、診療している状況であります。乳癌診療においては、ときに手術患者よりもさらに時間と労力を要する進行再発、終末期、緩和ケア患者さんが来院する場合も多く、スタッフ間の情報共有を重視した定期的な多職種カンファレンスや緩和ケア研修協力を行い全人的患者ケアの充実を図っています。当院における乳がん患者さんは60～70代の比率が高いのですが、最近では若い患者さんの来院増加を実感しています。妊孕性温存、乳房再建、遺伝性乳癌、子育て、就労支援など考えなくてはならないことがたくさんある患者さん達であるため、そこに寄り添える医療の充実に向け今後も前進していくことが重要と考えております。

患者の「治療」と同様に重要な、医員の「教育」に関しては、“数をこなす”も重要ではありますが、“一例を大切に”をモットーに、ローテーターであっても一つの手術や一人の外来患者さんを主治医的立場で安全に、そしてじっくりと診療することができるようなサポートを心がけております。また、地域医療機関との連携強化に関しては、山岡博之先生、土井卓子先生の直接の御指導、その他多くの先生方のご協力のもと、医師会での講演や各研究会でのディスカッションをさせていただきました。このような交流を通じた地域連携により2019年の初診患者数は278名（2018年253名、2017年258名、2016年242名）

と少しずつですが順調に増加しており、今後も上記交流を通じてこの地域での乳腺診療を代表できる機関となれるようさらに邁進していきたいと考えております。令和2年度からは当院より他関連施設へ医師派遣を行うことになりました。地域への医療貢献のみではなく、消化器・腫瘍外科学医局全体での乳腺診療体制維持に今後も協力していく所存です。

令和になり、茅ヶ崎市から当院に向けて2022年までの4年間での経営改革ロードマップが示されました。将来にわたる健全な経営環境実現のため、院内に経営企画課が新設され、厳しい業績指標のもと我々医師は日々奮闘しています。働き方改革が重要とされる社会背景を考慮し、医療レベルは落とさず、いかに業務時間を効率化し医師にとって働きやすい職場を実現できるかを日々考えながら科運営をしている今日この頃でございます。

先日、帰宅のため病院玄関を出た折、夜吹く冴ゆ風にかすかな潮の香を感じ、懐かしい気持ちになりました。私事ではありますが、この東海道は祖父母が暮らしていた思い出の地でありそのような気持ちになったのかもしれない。多くの方々に支えられ当科開設から4年が経とうとしています。この歴史ある茅ヶ崎市立病院において、今後もエビデンスに基づいた安心・安全・最新の医療を提供すべくさらに精進する所存であります。これからも茅ヶ崎市立病院乳腺外科への御指導御鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

（文責：嶋田和博）

横浜労災病院

〒222-0036 横浜市港北区小机町 3211
TEL 045-474-8111 FAX 045-474-8323

◆ 関連施設勤務者

乳腺外科部長 千島 隆司 (H.3)
乳腺外科医師 門倉 俊明 (H.18)
乳腺外科医師 木村 安希 (H.25)
消化器・一般外科医師
布施 匡啓 (H.27)

横浜労災病院は、横浜市北東部医療圏の地域中核病院として1991年に開設されました。2012年4月に乳腺外科が新設され、2015年8月からは外科（消化器・一般外科）へもスタッフが派遣されるようになり、2017年度は乳腺外科3名、消化器・一般外科外科1名で診療に当たっています。

☆ 乳腺外科の近況報告

当院では、2012年4月に乳腺外科が新設されました。2017年4月からは、がん・生殖医療、就労支援、遺伝相談などについて、治療前から治療後まで包括的に患者支援を行うための包括的乳腺先進医療センターが設置されました。本センターは、横浜市が推し進める「総合的ながん対策推進事業」の一つに位置づけられて、横浜市からの支援のもと「乳がんチーム医療のモデル施設」となっています。この事業の一環として、現在は「横浜市乳がん連携病院」の指定を受けた4病院（横浜労災病院、横浜市立みなと赤十字病院、横浜市立大学附属病院、横浜市立大学附属市民総合医療センター）が中心となって、市民啓発や医療スタッフ教育にも取り組んでいます。

包括的乳腺先進医療センターにおける2019年の手術件数は、悪性腫瘍の根治手術が270件、良性腫瘍やリンパ節生検などが39件、一次乳房再建術が35件（別途にシリコンインプラント入れ替え20件）、二次乳房再建が2件、画像ガイド下組織生検が80件でした。乳房再建に関しては、人工乳房再建症例の1/3,817-1/30,000にプレスト・インプラント関連未分化大細胞型リンパ腫（BIA-ALCL）が発生することが報告され、2019年7月25日からエキスパンダー／インプラントを用いた乳房再建が突如差し止めとなりました。7月24日に手術予定で入院して、一夜明けたら日本中で人工乳房再建手術が出来なくなっていたという、医療史上でも稀にみる“青天の霹靂”というべき出来事でした。11月からは代替品による人工乳房再建が再開されましたが、従来品と比べて整容面で劣るため、当院では自家組織再建の割合が増加している状況です。

令和2年度も横浜労災病院包括的乳腺先進医療センターは、1. 乳房再建などを中心とした患者QOLを重視した診療の実践、2. 国内外の臨床試験や新薬治験などの臨床研究の推進、3. 就労問題・遺伝相談・がんの生殖医療・アピアランス相談・メンタルヘルスなど患者支援の充実、4. 乳がん診療に携わる全国の医療スタッフを対象としたチーム医療教育の推進、5. 病診連携の充実と高齢・併存疾患を持つ患者に対する地域包括ケアの構築を5本柱に据えて日々の診療に取り組んでいきます。

☆ 外科（消化器・一般）の近況報告

当院の外科は千葉大第二外科（現先端応用外科学教室）の関連施設として、開院当初から尾崎正彦先生を中心に築き上げられてきました。2019度は、医局から布施匡啓先生が派遣されて孤軍奮闘、千葉大勢の中で一人気を吐いて頑張ってくれました。2019年の手術件数は711件であり、食道癌9例、胃癌37例、大腸癌118例、肝胆道癌33例、膵臓癌21例、胆石症144例、虫垂炎62例、ヘルニアは179例でした。当院外科では、食道癌での3領域郭清や骨盤内蔵全摘術などの拡大手術を行う一方で、ダビンチを用いたロボット支援下手術も積極的に導入しています。とても残念ではありますが、令和2年度からは、消化器・一般外科へ医局からの人材派遣は見送られることになりました。

横浜労災病院には心臓血管外科、呼吸器外科、小児外科、救急医療部が独立して存在し、外科専門研修プログラムにおいても専門医取得のための十分な症例を経験することができます。これからも横浜労災病院が消化器・腫瘍外科学の教育関連施設として「魅力的な病院」となれるように頑張りたいと思います。

後記：この原稿を作成した後に、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対する緊急事態宣言が神奈川県に発令されました。まだまだ感染収束が見えない中、医療崩壊に対する不安は募るばかりですが、一日も早くこの国難を乗り切って、平穏な日々を取り戻せることを祈るばかりです。

（文責：千島隆司）

横須賀共済病院

〒238-8558 横須賀市米ヶ浜通 1-16

TEL 046-822-2710 FAX 046-825-2103



横須賀共済病院は、古くは1906年に横須賀海軍工廠職工共済会医院として開設。戦後は海軍共済組合から財団法人共済協会、非現業共済組合連合会へ継承され、その後、国家公務員共済組合連合会（KKR）所属となった歴史のある病院です。

横須賀市、三浦半島における中核病院として、地域医療支援病院、がん診療連携拠点病院、神奈川県災害医療拠点病院、神奈川DMAT指定病院として急性期疾患からがん診療までスタッフ一同診療に励んでいます。

内閣府の戦略的イノベーションプログラム（SIP）「AI（人工知能）ホスピタルによる高度診断・治療システム」に採択され、さらに2019年のNewsweekに当院がWorld's Best Hospitalの一つに選ばれるなど、国内外にまで認められるようになりました。

2019年4月から、医局からは、長堀薫院長のもと、舩井秀宣部長、野尻和典副部長、医長として吉田謙一、小野秀高、諏訪宏和、大西宙、柿添学、医員として大矢浩貴、佐藤清哉の10名と、山梨大学から茂垣雅俊部長、救急科から1名とシニアレジデント5名の計15名が5チーム

に分かれて診療にあたっております。

2014年4月に就任した長堀薫院長は「若手外科医が楽しんで仕事する。救急は全応需する。」ことを強調されており、スタッフは以前よりもさらに多くの手術を経験するようになり、2019年の手術件数は年間1,500件を超えるようになりました。一方で、当直後のスタッフのoff dutyが義務化や有給休暇の取得を推進など、忙しいながらも、しっかり休むことが出来る様に努力しております。

病棟は、5チームに分かれて診療にあたっており、チーム内の受け持ち患者は臓器別に分かれていません。また、当院の研修医はやる気のある先生が多く、各チームに少なくとも1人が配属されて一緒に診療にあたっています。

術式は腹腔鏡手術が主体となっており、ヘルニア、虫垂炎、胆嚢結石症などの良性疾患から、胃癌、大腸癌、肝臓癌、膵体尾癌などの悪性疾患、消化管穿孔、Stoma造設など緊急手術まで、多くの手術が腹腔鏡下で行われています。この流れは、外科だけでなく、泌尿器科、婦人科、呼吸器外科、耳鼻科、脳神経外科、整形外科など他科にまで広がっています。2018年から直腸癌に導入し





たda Vinciを用いたロボット手術も週に1～2件のペースで行われるようになり、本年から婦人科、呼吸器外科も導入するようになったため、フル稼働の状態です。

術後のフォローアップは従来通り、横須賀医師会、近隣病院と連携して地域連携パスを適応しており、胃癌、大腸癌、乳癌の早期癌患者は、ほぼ全症例紹介いただいた先生に診て頂くことが可能となっております。本年からは胃癌、大腸癌で術後補助化学療法に対する地域連携パスを導入する患者も増えてきております。

学術関連では、地域診療所の先生方、病理、消化器内科、外科合同の消化器病カンファレンスを月に1回行っており、さらにそれを発展させた形で横須賀消化器病セミ

ナーを年に2回行っております。また、今年度も横須賀共済病院を筆頭とする学術集会総会の発表が増えてきており、学会期間中の手術件数の制限と腎陰不足が一つの課題となっておりますが、若手外科医によって、良い刺激、勉強の場となるため、今後も積極的に発表できるように勧めていきたいと考えております。

今後もさらなる地域医療支援、がん診療連携拠点病院として、地域医療に貢献すべく、質の高い水準の医療を提供できるように、若手外科医の教育を含めて精進する所存です。今後とも、益々のご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

(文責：小野秀高)



横浜市立みなと赤十字病院は横浜市民のための市立病院であり、日本赤十字社が指定管理を行う赤十字病院でもあります。

2019年4月から、外科では杉田光隆、大田貢由、渡部顕、久保博一、近藤裕樹、堀内真樹とシニアレジデント4名の計10名が診療にあたっております。肝胆膵および食道・胃領域を合わせた上部Groupと下部Groupの2チームに分かれて日々の診療にあたっております。乳腺外科では清水大輔、木村万里子、須藤友奈の3名が、緩和ケア内科では小尾芳郎が診療を行っております。また、中畠雅之先生には非常勤として毎週水曜日にTAPPを中心とした手術をご指導いただいております。乳腺外科では非常勤として盛田知幸先生、鈴木千穂先生に勤務していただいております。

当院の最大の特徴は、救急車の受け入れ台数が年間11,000台を超えており、緊急手術が多いことです。上部消化管穿孔、下部消化管穿孔に加えて急性虫垂炎やヘルニア陥頓、絞扼性イレウスやNOMI、急性胆のう炎などの緊急手術を上部グループと下部グループで協力し予定手術と並行して行っています。また、救急外科部長である馬場裕之先生が救急外科患者様の受け入れの窓口となつてくださり、昼夜問わず緊急手術の前立をいただいております。

もう一つの当院の特徴としては、ご高齢の方や既往が多数であり全身状態が不良な方が多いことです。特に、ヘルニアや胆石症などの患者様においては透析されている方、心機能が不良な方が多く見受けられます。そのような方を積極的に他院からご紹介いただき、手術も含め

た周術期管理を行っております。また、救急患者様ですでに全身状態が不良な方も集中治療部の先生方に術後の集中管理を依頼させていただくことにより、手術治療により専念して携わることができております。

肝胆膵領域では、杉田光隆部長が血行再建を伴う膵頭十二指腸切除術や腹腔鏡下肝部分切除術、腹腔鏡下膵体尾部切除術など積極的な治療を行っております。また、食道・胃領域では横浜市立大学消化器外科より小坂隆司先生、佐藤渉先生に手術指導をいただき腹腔鏡下胃切除の件数を大幅に減らすことなく行うことができました。一方で、大腸・肛門領域では特筆すべきは大田貢由先生が大腸外科部長に就任されたことです。渡部顕先生のご尽力により、すでにDa Vinciを用いたロボット手術は保険診療も含め軌道に乗っております。大腸・肛門領域でご高名な大田貢由先生がみなと赤十字病院に加わられたことにより、Da Vinci手術や腹腔鏡下手術はより加速すると考えております。

一方で、立地条件において交通の便が悪いことは否めず、地域の先生方からのご紹介をいただきづらいことはありますが、横浜消化器疾患研究会や病院主催の研究会を行うことにより交流を図らせていただいております。

赤十字病院としての側面と同時にがん診療連携拠点病院としての役割を果たすべく、質の高い医療を提供できるようにこれからも精進する所存ですので、今後とも益々のご指導・ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

(文責：久保博一)



◆ 関連施設勤務者

主任部長 福島 忠男 (S.3)
 部長 長谷川誠司 (H.2)
 上田 倫夫 (H.6)
 外科医員 和田 朋子 (H.20)
 齋藤 学 (H.25)
 木下 颯花 (H.28)

済生会横浜市南部病院は横浜市と済生会の共同で建設され1983年に開院した、27診療科500床の地域中核病院です。急性期医療を担うとともに、「地域医療支援病院」として地域医療機関との病診連携も推進し、2013年4月には神奈川県がん診療連携指定病院の指定を受け、がん診療支援センター（現センター長：福島）を設置しました。大腸がん・胃がん術後の診療連携パスは県内でも特に積極的に活用しており、がん診療体制の充実を計りつつ、合同カンファレンスや緩和ケア研修会等の研鑽も介して地域との連携にも努めています。

南部病院内での各種コンサートや市民公開講座、地元の港南区内の中学生を対象としたブラックジャックセミナーも継続しておりますが、神奈川県がん教育モデル授業として、中学校にて福島が外部講師として授業を行うなど地域に根差した活動も継続しています。また、南部病院フェスティバルとして、毎年6月に隣接したショッピングモール内でミニ市民公開講座や相談コーナーや体験コーナー設けていますが、今回は和田が乳癌についての講演を行い、地域の方々と直接触れあい、当院を身近に感じて頂けるように努めております。

当院は第二外科と第一外科の両医局から派遣されており、病院長は第一外科の今田敏夫先生でしたが、4月より放射線科の竹林茂生が就任されました。外科スタッフは第二外科からは福島忠男副院長のもと、長谷川誠司、上田倫夫、和田朋子、齋藤学、木下颯花の6名、第一外科からは虫明寛行、稲荷均、稲垣大輔、三箇山洋、瀬上顕貴、井口健太、森佳織、角田翔→古賀大靖の8名、計14名で、両外科スタッフが一体となって診療に臨んでいます。

2019年の外科手術は1,107件で1,200件/年程度から若干減少しましたが、年間100例以上の甲状腺手術を撤退したためと思われます。大腸癌切除症例は162例（関連手術200例以上）には変化がなく、食道癌1例、胃癌54例と上部症例が減少したものの、上田のもと肝胆膵系の悪性腫瘍手術は63例と漸増を維持し、和田の踏ん張りもあり乳癌も100例と増加しています。ヘルニア関連手術は224例に達し、虫垂炎84例、イレウスも30例近くとその他の緊急手術も多いのですが、その分、当院に赴任された若手スタッフの手術経験数も多く、また、研修医の先生方にも鼠径ヘルニアや虫垂炎等も積極的に行って頂き、手術指導に加え学術指導などを楽しみの糧にしながら日々の診療に臨んでいます。

薬物療法、外来化学療法センター長として長谷川が看護師（外科外来・外来化学療法室・がん化学療法認定）、薬剤師との連携の強化に努め、チーム医療ワークショップへの参加し、カンファレンスの充実とともに職種間の連携を更に深め、外来化学療法の円滑な運営、質の向上に努めております。

福島は副院長として責務を果たしつつも、総合患者支

援・入退院支援・臨床研究支援センター長も兼務し、当院運営、臨床研究にも大きく寄与しながらも、若手医師や女性医師にとっても働きやすい環境になるよう、働き方改革に沿って環境を整えています。

4月に導入したリニアックを十分に活用し、がん診療連携拠点病院の認定を取得すると共に、救急センター機能の充実・強化を図るなど、2027年以降の新病院の開設に向け周知な計画・準備を進めていますが、今後も地域医

療支援病院として、また、がん診療連携指定病院として医療情報共有と高度医療の提供、がん診療体制の充実及び地域との連携活動を推進し、患者さんたちの信頼に応えられるような地域トップクラスの医療を目指していきたいと思っています。これからもご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い致します。

(文責：長谷川誠司)

地域医療推進機構 (JCHO) 横浜保土ヶ谷中央病院

〒240-8585 横浜市保土ヶ谷区釜台町 43-1
TEL 045-331-1251 FAX 045-331-0864

JCHO横浜保土ヶ谷中央病院となり6年目となりました。病院規模は変わらず許可病床数260床（稼動病床数246）で患者さんは主に近隣の保土ヶ谷区、旭区、神奈川区の方が多く、地域に密着した医療・健診・福祉の総合施設として機能しています。

H31年度は池院長が新たに御就任され、令和元年への大きな転換の年であったと共に、当院も新たな出発の年となりました。池院長の御就任によって、当科もさらに活気づいた感があります。診療体制は上向部長のもと、齋藤健人（H7年、血管外科部長）、谷口浩一（H11年）、田中優作（H19年）、有坂早香（H20年）の5名でした。横浜市大・形成外科には形成外来を担当していただいております、こちらは継続していただいております。また、山本晋也先生に来ていただき、乳腺専門外来を再開いたしました。

外科病床は36床、対象疾患は例年同様で消化器癌が中心ですが呼吸器疾患（気胸、肺転移）、血管外科（AAA、ASO、シャント、下肢Varixなど）の治療も行っております。当院の特徴としては、比較的血管外科の症例が多い

ので外科専門医を目指す先生にとっては症例確保のためにもいいのではないかと思います。

昨年手術総数は466件で例年同様でしたが、縮小手術としての腹腔鏡手術を積極的に行う一方、高度進行癌に対しても術前化学療法や化学療法後のadjuvant surgeryなども積極的に行っております。

相変わらずかなりの高齢者、かなりの進行癌が多く術後管理に難渋することもあります、退院支援の担当各所ともOne teamとなって、元気に帰っていただくことにもやりがいを感じております。

当院は規模が大きい代わりに、他科の先生方やコメディカルの方々との連携が良く、いい雰囲気の中で仕事ができると思います。来年はまた医局の先生方のお力をお借りし、周辺地域の医療機関との連携を深め、一層地域医療に貢献していきたいと考えております。益々のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

(文責：谷口浩一)

横浜掖済会病院

〒231-0036 横浜市中区山田町 1-2
TEL 045-261-8191 FAX 045-261-8149

平成30年4月から佐藤芳樹（副院長）、森岡大介（部長）、泉澤祐介（平成16年卒）の常勤3人で診療を行っています。当院のような病院の常として手術症例の確保に四苦八苦しておりますが同じメンバーでの2年目の体制でしたので手術の症例数はともかく内容は大きく飛躍しました。

近隣で開業されている榎山信義先生が主に乳腺の手術指導、三浦勝先生が主に腹腔鏡視下大腸手術の指導に来てくださっており、常勤医の専門（佐藤→消化管・肛門、

森岡→肝胆脾）と合わせると基本的に一般消化器外科で扱うすべての疾患のspecialistがそろっていると考えて差支えないと思います。また当院のスタッフだけではできないような手術でも、上部消化管の鏡視下手術は南大和病院の高川亮先生、低めの直腸の鏡視下手術はセンター病院の渡邊純先生や福浦の石部敦士先生、など他院のspecialistにお越しいただきご指導・ご執刀いただいております。

遅ればせながら、今年度からようやく胃癌・大腸癌症例もガイドラインを遵守する範囲で腹腔鏡下手術を第一選択とすることができるようになってきました。当院当科の最大のセールスポイントであるヘルニアセンターですが、すべてのヘルニア手術において鏡視下手術が標準化に至り、平成31年～令和1年は鼠径ヘルニア手術122例中、TAPPが89例と約3/4がTAPP法となり、TAPP立ち上げから約3年で完全に標準手術となりました。また他院ではあまりやっていない腹膜前腔法術後の再発鼠径ヘルニアの完全鏡視下手術も標準術式として施行しています。TAPP法も約2/3の患者さんに対して日帰り手術で完遂しております。重篤な並存疾患のない鼠径ヘルニアの患者さんは、初診日にすべて検査を終わらせて次回来院日が手術日となるように可能なかぎり数少ない来院で済むように対応しています。

ICUがない、常勤の循環器医が不在など病院の特性上重篤な並存疾患がない方に限られますが腹部消化器外科領域において当院でできない手術は現状ないと思っています。

普段手術の指導をしていて感じるのは、忙しい基幹病院では手術数をこなさなければいけないため、血管をきちんと認識した郭清手技や肝門部の血管露出などやや手間のかかる手技は、時間的制約がありじっくり指導することができないのかなあ、と思っているのですが当院は時間があり手取り足取り指導できます。筆者（森岡）自身がかつて肝移植を専門にしていたこともあり血管露出手技には多少長けているため、数は稼げませんが少し面倒な手技をじっくり学ぶにはよい環境ではないかと思います。また肝胆膵領域の癌に対する手術は、標準的な症例では執刀のチャンスも与えています。かなりの拡大手術でもできるだけ前立ちで参加してもらうよう心がけていますので、症例さえあればという但し書きは付きますが、肝胆膵領域癌に対するきちんとした手術も経験可能です。少し変わった手術で言えば、大腸癌肝転移に対するoxaliplatin-based chemotherapyの副作用である門脈圧亢進症により食道静脈瘤出血を繰り返している患者さんがいらっしやいて、その方に対して脾臓摘出+門脈大循環シャント（下腸間膜静脈—精巣静脈シャント）術を施行いたしました。これも筆者（森岡）がかつて肝移

植を専門にしており血管吻合、腹腔内血管シャント手技には多少手慣れているため施行しえた当院ならではの手術であったかもしれません。その方は食道静脈瘤以外にも門脈圧亢進症の症状としてmassive ascites, pleural effusion, lower extremity edemaも存在し、それらに対してtolvaptanを使用していたのですが、シャント術後静脈瘤は消失しすべての利尿剤の中止も可能となりました。Oxaliplatin-based chemotherapyによるsinusoidal obstruction syndromeによる門脈圧亢進症は意外と頻度が高いことがわかっておりますのでそういった患者さんがいらっしやいましたら是非ご相談いただけたらと思います。

化学療法、terminal careなど癌再発後の医療も積極的に行っていますので、oncologistとしてのtrainingを初診からお看取りまで総合的に行える環境にあると思います。また当院最大のセールスポイントは時間的ゆとりのある病院であるため、1例1例について熟考熟慮しながら症例に応じたきめ細かい医療を行えることと同時に、手術数は決して稼げませんがskin-to-skinにわたって蒔蓄にあふれた手術指導を行っており、かつて在籍した若手の先生方のほとんどから“こんな手術をしたのは初めてです”というお言葉を頂戴しています。他の病院ではできていない若手医局員の教育を行えているのではないかなあと自負しております。また少ないながらも関連病院の中では比較的constantに英文をpublishしている方だとは思いますので、時間がある分論文執筆など学問的活動の指導もそれなりにはできているとは思っています。おそらくは当院当科からは初のことだと思われますが、令和2年度には英文原著が何本かpublishされる予定です。

当院のような中小の急性期病院は消えゆくしかないかのような制度改革がなされている昨今で、実際に患者さんの数も減っておりなかなか苦しい状況ではあります。しかしながら、大病院であるが故の小回りの利かなさで近隣的大病院で診きれていない患者さんのbackupを行いながら近隣の開業医の先生方が気軽に紹介できるという当院ならではのmeritを生かし、2024年の新病院への移転へ向けて今後もなお一層努力を続け患者さんだけでなく医局員のみなさんにも魅力的な病院にしていきたいと思っています。

（文責：森岡大介）

NTT東日本関東病院

〒141-8625 東京都品川区東五反田 5-9-22
TEL 03-3448-6557 FAX 03-3448-6558

NTT東日本関東病院の近況報告です。横浜市大からは縦山将士（H14卒）、豊田純哉先生（H26卒）が勤務しております。現在は医局からは2名の体制となっております。古嶋薫先生（S54卒）は一昨年に退官されましたが、週に1度、外来と肛門疾患の手術指導をしていただいております。2020年4月からは豊田先生と交代で布施匡啓先生（H27卒）が勤務予定です。また、外科部長が2020年1月から交代し、新外科部長のもと精力的に診療にあたっております。予定手術は年間約1300件で緊急手術は年間約130件です。

NTTの外科は上部、下部（2チーム）、肝胆膵、ヘルニア一般の5チームで編成されており、そのうち縦山は下部チームリーダーを任されております。豊田先生は各チームを3か月毎に上部、下部、肝胆膵、ヘルニアと全領域を満遍なくローテートし、消化器外科専門医に必要な症例を経験しております。

大腸癌手術は原発切除が約200例／年を維持しており、都内での症例数の多い施設です。消化器内科で内視鏡治療に力をいれているため、院内からの紹介症例数が多い

という幸運もありますが、きっちりとした外科治療ができているのも選ばれている理由だと思っております。手術は腹腔鏡手術を中心に行っておりますが、一定数開腹手術も経験できるようにもしております。また、2018年10月からは直腸癌に対してロボット支援下手術を導入いたしました。2020年1月からは術者資格が緩和されたのに伴い、助手経験数も重要になってくると思います。若い先生には病院負担で助手のcertificateを取っていただいて、手術に参加してもらいます。

他のチームでも、縦郭鏡下食道切除や腹腔鏡下肝切除の加えて、癰疽ヘルニア、鼠径ヘルニア、虫垂炎症例も積極的に腹腔鏡手術を導入しております。

都内で、横浜市大出身の医師がほとんどいない病院ではありますが、横浜とは異なった治療や手術手技が学べますし、下部消化管の腹腔鏡手術や消化器外科専門医に必要な症例が経験できると考えております。また、五反田には素敵な場所も多数ありますので働きにきてください。

（文責：縦山将士）

長津田厚生総合病院

〒226-0027 横浜市緑区長津田 4-23-1
TEL 045-981-1201 FAX 045-983-3647

日ノ出町に昭和22年に診療所として開設され、昭和24年に病院に転換した日ノ出町厚生病院が当院の前身です。その後、横浜市北部の開発に伴い、昭和30年に長津田厚生病院が開設され、昭和43年には拠点を日ノ出町から長津田に移し、現在の長津田厚生総合病院としての診療が始まりました。

病院規模は許可病床数が190床で、うち急性期一般病床が170床、療養型病床が20床です。健診センターや人工透析センターも併設されており、地域にとけ込んだ病院として機能しています。また、院内では、消化器内科や循環器内科、腎臓内科、整形外科、眼科、放射線科など他科の医師との連携も緊密に行いやすく、良好な関係の中で治療に当たらせていただいております。

外科は、森と平谷の2人体制でなんとか日々の診療をこなしております。対象疾患は胆嚢結石症や急性胆嚢炎、急性虫垂炎、鼠径ヘルニア、肛門周囲膿瘍、痔核などが主になり、胃癌や大腸癌の患者様には積極的に腹腔鏡下



の手術を行っています。しかし、我々のみでは力不足のため、大学や関連施設から医師の派遣を依頼することも多く、協力していただいた先生方、所属施設の先生方には大変感謝しております。

症例数は多いとは言えませんが、2019年は昨年と同等

の手術件数を維持し273件の手術を施行しました。内訳は鼠径ヘルニア74例、虫垂切除術10例、胆嚢摘出術21例、結腸・直腸癌手術17例などです。高齢で複数の合併症をもった患者様が多い中、安全を第一に考え治療にあたらせていただいております。さらに終末期・緩和医療にも力を入れており、近隣の病院からケアの必要な患者様を積極的に引き受けさせていただきました。

病院の全面改築については数年来構想が練られてきております。新病院が完成すれば患者数、手術件数も増加することが期待され、当院の医療の質の向上とさらなる発展につながるものと願っております。今後、益々のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

(文責：森隆太郎)

一般財団法人

育生会横浜病院

〒240-0025 横浜市保土ヶ谷区狩場町 200-7

TEL 045-712-9921 FAX 045-712-9926

◆ 関連施設勤務者

院長 長堀 優 (S.58)

外科部長 大山倫男 (H.20)

名誉院長 塩谷陽介 (S.36)

当院は、終戦翌年の1946年に横浜駅西口に近い岡野町で開院し、2016年には開設70周年を迎えています。終戦の直後、ほとんどの医療機関が焼失した中、医療の中でも出産や子育て時の医療が重要になるとの理念から設立された財団法人が基盤となっています。開院当初より、通常の医療活動に加え、社会福祉事業法の定めによる無料低額診療事業、特に乳幼児の保健と保育に力を注いできました。そのため、「生まれ育てる会」の意味から、法人名が「育生会」と命名されました。

1995年の保土ヶ谷区狩場への移転を機に、高齢者医療に軸足を移しました。団塊の世代がすべて後期高齢者になる超高齢化社会を控え、病院と介護老人保健施設「ユトリウム」、特別養護老人ホーム「よつば苑」とを併設した複合施設となることにより、これから求められる医療に向けて、第二のスタートを切ったと言えるでしょう。2019年5月の令和改元とともに、港南台に新たに特養「ひまわり」を開設しています。

当院は、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるように、患者さんやご家族を支える訪問診療を早くから導入しています。同じグループ内には、グループホームも併設していますので、日本が直面する超高齢化社会において、地域医療ケアの中心となって貢献する使命があるものと考えています。

横浜市は、大規模な急性期病院を多数有しており、保土ヶ谷区だけでも横浜市立市民病院、聖隷横浜病院、横浜保土ヶ谷中央病院などが急性期医療を担っており、近隣にも横浜市大市民総合医療センター、済生会南部病院、

横浜市立みなと赤十字病院、けいゆう病院、東戸塚記念病院などがあります。

老健、特養を併設している当院は、このような急性期大病院の機能を補てんすべく、急性期医療より、高齢者医療に力を入れているのが特色です。急性期病院と密接に連携し、治療後すぐには自宅に戻れない患者さんを当院で引き受けて治療を続けています。

私が当院へ移るきっかけは、前任地の横浜市立みなと赤十字病院、JCHO横浜保土ヶ谷中央病院(旧 横浜船員保険病院)で救急医療の責任者を務めていたことでした。

救急医療の現場は、すでに超高齢化社会を迎えた我が国の縮図であり、誤嚥性肺炎や大腿骨頸部骨折などの高齢患者の入院が増加する一方です。高齢者の入院長期化や認知症に伴うせん妄や転倒への対応などにより、救急医療の現場では、効率の低下が大きな課題となっていました。

このような患者に対応しうる医療施設を準備することは急務であり、しかも、救急医療の現場経験者が携わる必要があるとの思いが年々強くなっていきました。私は、JCHO保土ヶ谷中央病院に勤務していた時期より、育生会横浜病院こそが、高齢者医療をサポートする現場としてうってつけであると考えようになり、遠藤教授にご相談のうえ、着任を決めさせていただいた次第です。

5年前に赴任してすぐに地域包括ケア病棟を開設、先述の医療機関にお知らせしたところ、目論み通り急性期後の患者転院のお問い合わせを多数いただくこととなり、入退院数が一気に倍増しました。

その後、地域包括ケア病棟は近隣の病院にも次々に開設され、急性期後の医療は他院と分担することになりました。しかし、200床以下の当院は、訪問診療を担ういわゆる「在宅療養支援診療所」の医師との連携を結ぶことができます。当院と連携した医師は、入院ベッドを確保

しているものと認定され、医学総合管理料に則り、患者宅ないし施設を訪問した際に加算を得ることができます。

また、連携した診療所の医師からは、訪問している患者さんの緊急時（看取り、熱中症や肺炎など）や、レスパイト入院（介護者の休息のための一時預かり）、リハビリ入院などを当院に依頼されることになります。

連携診療所と当院がこのように、お互い密に協力し合うことが、地域医療への貢献につながります。保土ヶ谷区では、地域包括ケア病棟と訪問診療を手掛けるクリニックの間で、まさにウィンウィンの関係を築くことができます。

小規模の当院の地域包括ケア病床であるからこそ可能となるこのような地域のクリニックとの連携は、当院の大きな強みと考えています。

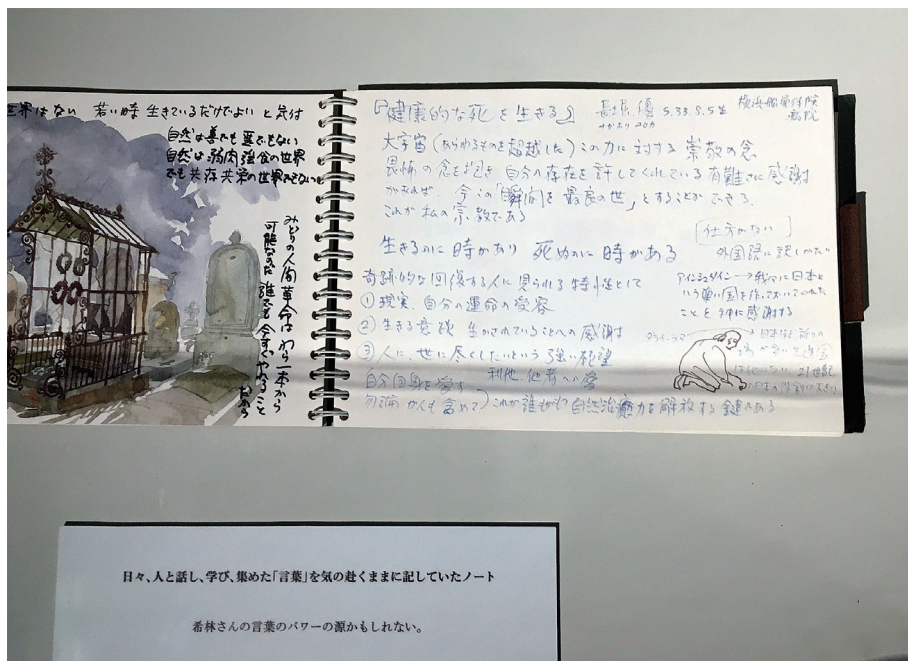
日本社会の超高齢化が進行する限り、当院に対する入院需要はますます増加するものと思われます。地域からのさらなる要請にお応えできますよう体制を引き続き充実させていくつもりです。お困りのことがございましたら、いつでもご連絡くださいますようお願いいたします。

個人的なことになりますが、数年前に自分なりの死生観をまとめて拙い本「見えない世界の科学が医療を変える」を出版しました。じつは、女優の故樹木希林さんが、拙著をお読みになり、メモに遺されていたことがわかりました。

2019年3月に渋谷西武百貨店で行われた希林さんの遺品展「遊びをせんとや生まれけむ展」にそのメモが展示

されました。このようなこともあってか、地元老人クラブ連合会での講演なども依頼されるようになりました。さまざまな機会を利用し、さらに当院の名前を広め、地域への貢献度を高めていきたいと考えます。

この先も、医局のご支援を仰ぎながら、地域医療充実のため頑張りたいと思います。よろしくお願い申し上げます。（文責：長堀 優）



港 南 台 病 院

〒234-8506 横浜市港南区港南台 2-7-41
TEL 045-831-8181 FAX 045-831-8281

2013年4月より大塚裕一が赴任しており、今年で7年目を迎えました。2018年4月より山口直孝との勤務が続いております。

医療法人として病院、介護老健施設、有料老人ホームを運営してきましたが、2020年2月、現病院そばに「グループホームにじいろ港南台」を開設しました。一般的にはグループホームでは比較的身体的には状態が保たれている認知症の方に入所していただくことが多いですが、これからは病院が直接運営するグループホームとして、医療の介入を従来より必要とする認知症の方を受け入れていくことになるものと思われます。

また、昨年のご案内しましたが、港南台駅北側に新病院設立の準備を進めています。名称はその名も「よこはま港南台地域包括ケア病院」に決まり、全病床を地域包括ケア病床とする計画です。「ときどき入院、ほぼ在宅」

をキーワードに、急性期高度病院から在宅療養への橋渡し、近隣の訪問診療クリニックとの連携をおこなって、ご家族の介護負担を軽減しつつ、港南区を中心とした横浜市南部の医療、介護にさらに貢献していきたいと考えています。

今後の目標として、我々の提供していく医療の質の維持をする一環として、日本緩和医療学会認定研修施設取得への準備を始めています。具体的には、私自身が研修指導者資格を有する認定医となりましたので、認定施設を取得するとともに常勤医や看護師の教育にもつなげていければと思っています。

これからも今までと変わらず「困ったときには港南台病院にちょっと相談してみよう」という気軽な感じでご相談下さい。今後ともよろしくお願い致します。

(文責：大塚裕一)

松島病院大腸肛門病センター

〒220-0041 横浜市西区戸部本町 19-11
TEL 045-321-7311 FAX 045-321-7330

医療法人恵仁会には松島病院、松島クリニックと一昨年に開業した松島クリニック汐留の3施設があります。同門会の医師は現在5名が勤務しています。松島病院には松島 誠理事長、松村奈緒美、深野雅彦、松島クリニックには福島恒男先生、杉田 昭先生が所属しております。

松島病院には現在麻酔科医を含めて17名の常勤医と11名の非常勤医が在籍しております。昨年も約5000件の手術を行いました。最先端の経肛門の超音波検査、S状結腸内視鏡検査、肛門内圧検査、そして排便造影等の検査を積極的に行い、系統立てた大腸肛門疾患の診療を行っています。また、痔核や直腸粘膜脱等に対しては従来の手術方法ばかりでなく、MuRAL法という新しい手術方法を行っています。痔瘻に対しても当院で開発した肛門機能温存術式（FPOT）を積極的に行い、良好な成績を得ています。直腸脱では排便造影や内圧検査等を行い、術式を決定しています。横浜市民病院と連携をとり、腹腔鏡下直腸固定術が必要な場合には手術を行って頂いています。排便機能センターも患者もかなり増加し、便秘失禁や排便障害の患者の診療にあたっています。排便障害等の患者に対するバイオフィードバック訓練の件数も増加しています。当院では職員を対象に排便機能や医療経済

等の勉強会が行われています。また、医局でも毎週症例検討会を開き、難治性肛門疾患や珍しい症例の報告、治療方針の決定を行っています。

松島クリニックは消化器内科、内視鏡診療と人間ドックを行っています。消化器内科の中でも特に炎症性腸疾患や過敏性腸症候群に対しては専門外来で診療しています。昨年からは杉田 昭先生にも非常勤として診療にあたっています。内視鏡検査の昨年の実績は、大腸内視鏡検査が16,162件、ESDを含めた内視鏡治療が3,054件、上部消化管内視鏡検査が5,013件でした。松島クリニックでは、消化器の勉強会や症例検討会、炎症性腸疾患のカンファレンスが行われています。

松島クリニック汐留は松島クリニックのサテライトクリニックとして2018年に浜松町に開院しました。こちらも消化器内科と消化器の専門クリニックです。2019年の実績は大腸内視鏡検査が1,742件、上部消化管内視鏡検査が1,061件でした。

恵仁会は現松島病院の老朽化に伴い、2023年に松島病院と松島クリニックを統合し新病院を開設する事になりました。日本の大腸肛門疾患診療を牽引すべく、松島理事長以下職員一丸となり頑張っていく所存です。引き続

きの御指導御厚誼を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。
(文責：深野雅彦)

辻仲病院 柏の葉

〒277-0871 柏市若柴 178-2 柏の葉キャンパス 148 街区 6
TEL 04-7137-3737 FAX 04-7137-3738

皆様いかがお過ごしでしょうか。これが出るころには
コロナウイルスも一段落していると思っております。当
院は開院して11年目に入りました。去年東邦医大大森病
院の外科助教授の小池先生と、同じく東邦医大佐倉医療
センター消化器内科でIBD専門の竹内先生が新しく就職
してくれました。外科においてはISRまで適応範囲が広
がりました。IBDにおいてはセンターを開設して患者数
を増やしていくことにしております。肛門科、内視鏡も
現状を維持していくよう努力しておりますが、内視鏡検
査予約をこなすのが大変になってきております。臓器脱
手術も順調で件数では全国レベルになっています。横浜
からかなり遠くにお目にかかることも少ないですがこれ
からもよろしくお願いいたします。

なお写真はテレビでも少しだけ話題になりましたが、
一昨年当院の屋上緑化にカルガモ親子が居着いていた頃
のものです。周りはかなりビルが多くなってきています
が自然もまだ少しあります。(文責：浜畑幸弘)



医療法人社団 松田会 荒川外科肛門科医院

〒116-0002 東京都荒川区荒川 4-3-11
TEL 03-3806-8213 FAX 03-3803-7224

「気配り、目配り、思いやり」と朝礼の挨拶の締めく
くりのこの言葉が1日の診療の始まりだ。松田好雄先生
がご開業されてから34年間、毎朝お話しするのが慣習で
ある。

この言葉は、松田先生の30歳代からご友人であられ、
故土屋周二先生の旧知の仲であった元がん研究会有明病
院総長であられた武藤徹一郎先生から贈られたのであっ
た。当院は肛門外科が専門で、消化器病一般を診療して
いる19床の診療所である。

2019年4月から法人化され、医療法人社団 松田会 荒
川外科肛門医院 と名称が正式に変更された。

一見わかりにくいですが それまでの名称は荒川外科肛門科
医院であった。

ベッドを継承していくためには法人化が必要で、さら
に肛門科の「科」の有無で審査が変わる。

現在、常勤医は院長松田好雄・松田大助(東京医科大学)
・武田幸樹(日本医科大学)・大高京子の4人である。
近隣の東京大学医学部・東京医科大学・日本医科大学・
東京女子医科大学付属病院、駒込病院、等の地域連携に
より、日々の診療はより一層確実なものとなっている。

2018年12月には総患者数は10万人を突破した。この
2019年の一年間の新患者数は4,364人であった。

2年前から始まった顆粒球除去療法GCAPは12月上旬で
107回を越えた。

炎症性腸疾患の活動期から寛解へ向けて、より一層の
治療効果が期待できるようになった。特に痔瘻を合併し
たクローン病では、難治性である肛門病変の改善がみら
れ治療効果が明確なことがわかる。

ここで2019年の業績をみますと、腰椎麻酔下の手術症
例は約1,000例で例年通りである。12月12日現在で特に痔

瘻は247件、そのうち複雑痔瘻であるⅢ型痔瘻は18件であった。

消化管内視鏡検査では、上部消化管4,037件、下部消化管5,141件であった。腹部超音波検査は2,556件であった。

内視鏡センターでは、検査の医師は10人ほどで東京大学医学部附属病院 大腸肛門腫瘍外科、東京医科大学内科・外科、日本医科大学、国際医療福祉大学三田病院、昭和大学消化器センターからご協力いただいている。腹部超音波検査は検査技師5人が担当し、腹痛や下血など緊急時にも対応できている。

この業績は、約50人余りの職員の頑張りでご協力賜っ

ている先生方のおかげであろう。

医者が新規開業もあれば継承もある。院長の交代は当人たちに対して、その準備に想像を絶する大変な努力が必要である。

30年余りという歳月は、人も変わり、診断や治療の方針も変わり、新たに始めるのにはいくつもの壁がある。今まで諸先輩のご協力、ご指導のもと成り立ってきた。生まれ変わりつつある当院に期待していただければ幸いである。

(文責：大高京子)

令和2年度 関連施設勤務者

(2020年6月現在)

●独立行政法人国立病院機構横浜医療センター

〒245-8575 横浜市戸塚区原宿3-60-2
TEL 045-851-2621 FAX 045-853-8359

診療統括部長	関戸 仁 (S58)		
外科部長	松田 悟郎 (H5)	清水 哲也 (H9)	
外科医長	木村 準 (H15)		
医 師	柿添 学 (H16)	大西 宙 (H21)	堀井 伸利 (H21)
	藤原 大樹 (H24)	田中 裕佳 (H26)	
非常勤勤務	太田 郁子 (H14)		

●横浜市立市民病院

〒221-0855 横浜市神奈川区三ツ沢西町1-1
TEL 045-316-4580 FAX 045-316-6580

消化器外科科長 部長	望月 康久 (S62)		
消化器外科部長	高橋 正純 (S58)	藤井 義郎 (H3)	
消化器外科副医長	田中 優作 (H19)		
医 師	木下 颯花 (H28)		
炎症性腸疾患 (IBD) 科	炎症性腸疾患センター長 小金井一隆 (S61)		
炎症性腸疾患 (IBD) 科部長			
	杉田 昭 (S54)	辰巳 健志 (H12)	
乳腺外科科長 部長	石山 暁 (S58)		
乳腺外科部長	鬼頭 礼子 (H9)		

●藤沢市民病院

〒251-8550 藤沢市藤沢2-6-1
TEL 0466-25-3111 FAX 0466-25-3545

消化器外科主任部長	医療支援部長	患者総合支援センター長	
	山岸 茂 (H7)		
専門医長	牧野 洋知 (H8)	大田 洋平 (H16)	浅野 史雄 (H17)
	田 鍾寛 (H21)		
医 師	川島 圭 (H29)		
乳腺外科部長	菅江 貞亨 (H12)		
呼吸器外科主任部長	吉本 昇 (H5)		

●伊東市民病院

〒414-0055 伊東市岡196-1
TEL 0557-37-2626 FAX 0557-35-0631

副病院長兼診療部長兼外科部長	
神谷 紀之 (H4)	

●横須賀市立市民病院

〒240-0195 横須賀市長坂1-3-2
TEL 046-856-3136 FAX 046-858-1776

副病院長・診療部長 亀田久仁郎 (S63)
診療部長 長嶺弘太郎 (H6)
医 長 三宅 益代 (H21)
医 師 小暮 悠 (H21) 藤原 淑恵 (H24)

●茅ヶ崎市立病院

〒253-0042 茅ヶ崎市本村5-15-1
TEL 0467-52-1111 FAX 0467-54-0770

乳腺外科部長 嶋田 和博 (H15)
乳腺外科医師 須藤 友菜 (H26)

●横浜労災病院

〒222-0036 横浜市港北区小机町3211
TEL 045-474-8111 FAX 045-474-8323

包括的乳腺先進医療センター長 乳腺外科部長
千島 隆司 (H3)
乳腺外科医師 原田 郁 (H20) 小林侑華子 (H27)

●横須賀共済病院

〒238-8558 横須賀市米ヶ浜通1-16
TEL 046-822-2710 FAX 046-825-2103

病 院 長 長堀 薫 (S53)
消化器病センター長 外科部長
舩井 秀宣 (S62)
外科副部長 野尻 和典 (H12)
医 長 吉田 謙一 (H8) 小野 秀高 (H10) 南 裕太 (H13)
諏訪 宏和 (H15) 鈴木 千穂 (H22)
医 員 酒井 淳 (H27)
非常勤医師 太田 郁子 (H14)

●横浜みなと赤十字病院

〒231-8682 横浜市中区新山下3-12-1
TEL 045-628-6100 FAX 045-628-6101

院長補佐、外科部長、肝胆膵外科部長
杉田 光隆 (H5)
大腸外科部長 大田 貢由 (H3)
食道・胃外科医長 佐藤 圭 (H18)
大腸外科医長 森 康一 (H21)
医 師 山田 淳貴 (H24) 堀内 真樹 (H27) 窪田硫富人 (H29)
乳腺外科部長 清水 大輔 (H8)
乳腺外科医長 門倉 俊明 (H18)
緩和ケアセンター長 緩和ケア科部長
小尾 芳郎 (S57)

●済生会横浜市南部病院

〒234-8503 横浜市港南区港南台3-2-10
TEL 045-832-1111 FAX 045-832-8335

副院長 主任部長 患者サービス・地域連携部長 入退院支援センター長
福島 忠男 (S62)
外科部長 長谷川誠司 (H2) 上田 倫夫 (H6)
外科医長 和田 朋子 (H20)
医 員 荒木謙太郎 (H22) 村上 剛之 (H25)

●済生会若草病院

〒236-8653 横浜市金沢区平潟町12-1
TEL 045-781-8811 FAX 045-784-5443

院長補佐 山本 俊郎 (S54)
外科医長 有坂 早香 (H20) 坂本 里紗 (H21)
非常勤医師 足立 祥子 (H22)

●JCHO横浜保土ヶ谷中央病院

〒240-8585 横浜市保土ヶ谷区釜台町43-1
TEL 045-331-1251 FAX 045-331-0864

病 院 長 池 秀之 (S54)
診療部長 上向 伸幸 (H6)
外科部長 谷口 浩一 (H11)
健康管理科部長 簾田康一郎 (S60)
医 師 泉澤 祐介 (H16)
非常勤医師 足立 祥子 (H22)
検 査 科 窪田 徹 (S61)

●横浜掖済会病院 外科

〒231-0036 横浜市中区山田町1-2
TEL 045-261-8191 FAX 045-261-8149

副 院 長 佐藤 芳樹 (S59)
部 長 森岡 大介 (H5)
医 長 山口 和哉 (H22)

●NTT東日本関東病院 外科

〒141-8625 東京都品川区東五反田5-9-22
TEL 03-3448-6111 FAX 03-3448-6558

医 長 樺山 将士 (H14)
医 師 布施 匡啓 (H27)

●長津田厚生総合病院 外科

〒226-0027 横浜市緑区長津田4-23-1
TEL 045-981-1201 FAX 045-981-1205

副院長 外科部長 森 隆太郎 (H12)
医 師 平谷 清吾 (H18)

●育生会横浜病院

〒240-0025 横浜市保土ヶ谷区狩場町200-7
TEL 045-712-9921 FAX 045-712-9926

院長 長堀 優 (S58)
医師 峯岸 裕蔵 (H21)

●港南台病院

〒234-8506 横浜市港南区港南台2-7-41
TEL 045-831-8181 FAX 045-831-8281

院長 神谷 周明 (S45)
副院長 大塚 裕一 (H8)
医師 山口 直孝 (H13)

●帝京大学ちば総合医療センター 外科（肝胆脾）

〒299-0111 千葉県市原市姉崎3426-3
TEL 0436-62-1211

助教 村上 崇 (H18)

●聖路加国際病院 乳腺外科

〒104-8560 東京都中央区明石町9-1
TEL 03-3541-5151

医師 喜多久美子 (H17)

●松島病院

〒220-0041 横浜市西区戸部本町19-11
TEL 045-321-7311 FAX 045-321-7330

理事長・総院長 松島 誠 (S53)
女性専門外来部長 松村奈緒美 (H5)

●栃木県立がんセンター

〒320-0834 宇都宮市陽南4-9-13
TEL 028-658-5151 FAX 028-658-5669

菊地祐太郎 (H21)

●藤沢湘南台病院

〒252-0802 藤沢市高倉2345
TEL 0466-44-1451 FAX 0466-44-6771

副理事長 副院長 医療安全管理室副室長
鈴木 紳祐 (H19)
救急科部長 外科担当部長（救急）
小泉 泰裕 (S61)

●関沢クリニック

〒236-0053 横浜市金沢区能見台通8-28
TEL 045-786-8852 FAX 045-786-9293

関澤健太郎 (H19)

●荒川外科肛門科

〒116-0002 東京都荒川区荒川4-2-7
TEL 03-3806-8213

院 長	松田 好雄 (S43)
副 院 長	大高 京子 (S56)

●医療法人社団康喜会 東葛辻仲病院

〒270-1168 千葉県我孫子市根戸946-1
TEL 04-7184-9000

院 長	松尾 恵吾 (S59)
-----	-------------

●特定医療法人社団鵬友会 湘南泉病院

〒245-0009 横浜市泉区新橋町1783
TEL 045-812-2288

三 邊 大 介 (H2)
